

令和元年5月5日発行(毎月5日1回発行)  
第59巻5月号(通巻718号)

# 風土



## 太宰忌の差入といふ酒享くる

(句集『高蘆』より昭和四十五年作)

この句には「裸より笠原朶來の腕のみ出」の前書きがあります。谷川温泉という処で、「風土」の初めての鍛練句会が行われた時の句です。季節的にはずれているのですが、季語に「太宰忌」と置いたのは、この地で太宰が小説『創世記』を書き上げたからです。また太宰は何回か自殺をはかっていますが、最初の女性とのえにしもあったようです。桂郎師にとって太宰は同年齢で、小説家としての交流もあったので、数多の「太宰忌」の句が残っています。この「差入」は太宰を偲ぶ酒となったことでしょう。

## 瀧の中逆のぼる水のありにけり

(句集『高蘆』より昭和四十五年作)

この句は岐阜県の養老公園の養老寺の境内に句碑として建っています。岐阜には「風土」の支部もあり、桂郎師は何度も養老の瀧をおとすれ、ついにこの句を得ました。「逆のぼる水」は桂郎師が心の眼で、「瀧のいのち」を捉えたものです。

寒 椿 ま な こ 閉 づ れ ば 妻 の 咲 く

(句集『幻』より平成八年作)

器師は平成七年クリスマスの日、長い闘病生活のすえに最愛の妻を亡くしました。その死の直前の句が「冷えてゆく手に握らせて手をつなぐ」です。さて採りあげた句の「寒椿」は、器師の家の「寒椿」です。おそらく生前の妻と何度となく佇んだことでしょう。今その椿に向かい眼を閉じると、妻との思い出が次々に浮かんできます。この「寒椿」はまるで妻の魂が咲かせているように感じたのです。器師の言葉に「命ふたつ」がありますが、器師は、「椿のいのち」が妻の魂と融合して、「吾が魂」にひびいてくるのを実感しているのです。

死 後 の 妻 ほ め ら れ て を り 亀 鳴 け り

(句集『幻』より平成八年作)

法事の時の一齋でしょうか。奥さんのエピソードが話題になり、みんなが誉めています。「そうかそうか」と頷きながらも、どこか面はゆい心性を、「亀鳴けり」と置いたのです。

金 気 水 南 う み を

大楠のきししみだしたる追儼の火

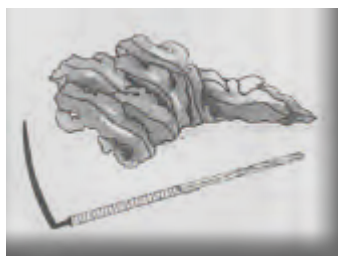
追儼火や人形の髪総立ちに

追儼火守うしろ向きては煙草吸ふ

偕老の手をさし伸べて追儼の火

薄氷コーラの腰にしがみつ

打つたびに二月の鍬のひかり増す  
野の梅の股にしつかとラジオ据ゑ  
春寒の捨田にソーラーパネル着く  
金気水ぬるむ光琳模様なる  
春一番小石が靴に入りたがる  
堅香子のひづめの音にふるへだす  
椿落つ猪のぬたくる泥のうへ



# 竹間集

同人作品



二月尽

中村洋子

下萌をうながす小さき雨の音  
鬼達の逃げやすきやう豆を撒く  
恋の猫とどのつまりに引き返す  
山焼きの若草山の夜空焦げ  
野面積の残る城址へ春一番  
あら汁の大鍋仕立て二月尽  
合格す駅へ駆け出すおさげ髪

草萌ゆる

橋添やよひ

草萌ゆるチェンソー・アート動物展  
土筆野や昼の鶏鳴とどきける  
猪の宮にけもの匂ひ春立てり  
春禽や騎馬隊練習初めの日  
寒梅や烏帽子屋は奥灯しける  
梅が香や義政公の学問所  
漱石の愛でし膝掛け毛布かな

春夕焼

山田暢子

一枚づつ空を剥がして木々芽吹く  
佇みて春夕焼につつまるる  
春の川やさしき音を流しけり  
鳥帰る空へこころを預けたる  
茶杓にも名前のありて桃の花  
啓蟄や夫婦の下駄は下駄箱に  
さくらさくら後十年は生きんとす

梅一輪 岩木 茂

蕾寒山神社二句百二 百三 百梅 一輪  
鯉と鯉ぶつかり寒の明けにけり  
水の春空より雀こぼれ来る  
扇骨を干して霞の中にをり  
根分してちちははの菊あねの菊  
母の忌や足す一品の花菜漬  
遺言のごと白梅の一花あり

夜 雪 小林輝子

音無しの夜雪たしかむ地獄耳  
真夜の庭狐の青き目と逢へり  
紅刷かれ雪夜買はれゆくこけし  
立春を十日過ぐるに綿半纏  
春の季寄せ出しては仕舞ふ空模様  
夕さりの空を響動(とよ)もし鶴去ぬ  
引鳥の撒かれしやうに朝の砂州

ないしよ内緒 田村すゝむ

「風土」誌吾大六十年の年新た  
遙かなるものへ祈りを恵方道  
一芝居打つて二日の家を出る  
三日はや昨夜の夢はないしよ内緒  
大き円書いて真中に日向ぼこ  
春なれど生きて一人の果て思ふ  
車椅子春の小川に寄り添うて

鳥 帰 る 田中佐知子

猟銃の音が伏せぬる坐禅草  
梅東風や京へ若狭へ道岐れ  
笥よりとび出て春の水となる  
円形の野外ステージ初蝶来  
ルノワールとなる三月のカレンダー  
歌塚に下萌の地のやわらかし  
波引きしあとの潮の香鳥帰る

余生

工藤ミネ子

若杉の迷ひなき苾春立てり  
ニン月や襷囿ひのケアハウス  
ニン月の樹々ふところに施設の灯  
春の土匂ふ石蹴り遊びの子  
嫩草を静かに踏みて余生かな  
熊穴を出て湖の岸歩く  
樵若葉浴びたく車進めけり  
万緑や車の前に親子熊  
熊去りて真夏の湖の残りけり



言の葉の我が身はなるる炎天下  
稲架道を過ぎ急坂の道つづく  
秋晴や山の重なる湖の面  
立ち上がる熊胸座に落穂つけ  
熊付けし車窓の泥に秋夕焼  
芒原分け親熊のもどり来し  
太平湖道の閉ざされ熊穴に  
元日や孫からまなこ放されず  
ふしくれし妣の手想ひ年用意  
日々雪や机上に読まぬ本積みて  
老松にことの葉宿る春の園

# 山河集

同人作品



南うみを選

湿原はやがて大河にふきのたう

岡本 尚子

馥郁と月を上げたる梅の山  
涅槃図の余白震はす風一陣  
掌に光満ちあふれ来る春の水  
被災地のブルーシートや余寒なほ

片桐紀美子

日の暮や白を汚さず花辛夷  
まんさくや寺宝蒔絵の貝合せ  
街なかにかに時のゆるぶや糸柳  
工房のこけし揺らめく朧の夜  
潮騒の風を引き寄せ若布干す

松本 胡桃

あたたかや九官鳥の独り言  
芸人も力士も来り鬼やらひ  
成田屋の目力強し鬼やらひ

春の夜の余白に書きて花言葉  
菜の花や子に托せざる事のあり

山田 健太

したたかに春雪拒む志士の墓  
水音の硬き流れや追儼の灯  
立春や菜味に味噌に贅尽くす  
ふつくらと春の雪あり母の墓  
芹洗ふ水のはたては渦をなし

中嶋 陽子

梅咲くや婚家に馴染む割烹着  
恋猫のこぶしをきかせすぎてをり  
北窓を開きて聞こゆ父の声  
ぐらぐらとつり橋渡り雪解風  
ふるさとの木の香風の香雪解川

# 風土独語／南 うみを



淡雪は熊野の神の目覚め雪

上辻 蒼人

「熊野」は熊野本宮など神の住む山です。そこに降る「淡雪」を、作者は神を目覚めさせる雪だと述べています。つまり冬の雪から春の雪に変わり山々に胎動が始まるのだと。この受け止め方は、土着の人間もので、「神の目覚め雪」は、言葉が借り物でなく肉体化されていることを読み手に知らせています。

湿原はやがて大河にふきのたう

岡本 尚子

「湿原はやがて大河に」で、読み手の目はいきなり高所に引き上げられ「ふきのたう」で再び湿原に戻されます。「ふきのたう」を育む小さな流れが、滔々とした大河に広がる壮大な水のドラマが一瞬にして目の前に現れています。

樹木医の木槌にあがる春の音

赤石 梨花

この句は、春になり「樹木医」の活動が始まったのを「木槌」に象徴させています。幹の様子を診る「木槌」の音を「春の音」と置き、胎動感を出しています。

日の暮や白を汚さず花辛夷

片桐紀美子

「花辛夷」は清浄な白が特徴です。作者はそれを強調し「白を汚さず」と置きました。「日の暮や」でうす暗さを出し、「花辛夷」の白が浮かび上がるように演出させています。

風除けの松やみちのく眠りをり

森田 節子

「風除け」は寒風から家を守るための垣で、おもに日本海の海辺に見られます。ここでは松がその役目を担っています。おかげで東北の村々は冬の眠りにつけるのです。

成田屋の目力強し鬼やらひ

松本 胡桃

「成田屋」は歌舞伎の荒事を得意とする市川団十郎門の屋号です。ここでは「鬼やらひ」に一役買っています。その「睨み」を「目力強し」と置きました。鬼の退散まぢがいなし。

芹洗ふ水のはたては渦をなし

山田 健太

「芹」は香りが強くお浸しや和え物に使われます。また「はたて」は端つこのことです。その水が渦をなしていることで、雪解けの豊富な流れを読み手に伝えています。

さんしゅゆと言ふ口もとをつまみたる

雨宮 桂子

この句を読み、川崎展宏の「冬と云ふ口笛を吹くやうにフユ」を思い出しました。確かに「ユ」と言う音は口を尖らせます。さて、この「口もとをつまみたる」は私が、相手か。〈以下略〉

# 風土集



## 南うみを選

梅ふむむ風の硬さの中にかな 五條 上辻 蒼人

結び目の解れ落ちたる冬椿

葛城の背美しき春の雪

神官の杵の音曳く余寒かな

淡雪は熊野の神の目覚め雪

魚の腸抜かれて寒の明けにけり 横浜

県境を越え来し荷より雪雫

露の臺他郷これより終の地か

樹木医の木槌にあがる春の音

磯草の中に降りたる春の鳥

五能線寒風を背に無人駅 川崎

地吹雪にしなひつ向きつ白樺

風除けの松やみちのく眠りをり

待春の語尾はね津軽なまりかな

春光の航跡を曳く舳かな

森田 節子

赤石 梨花

遠富士に朝雲の浮き花辛夷 平塚 片桐紀美子

春暁や嶺渡りゆく鳥の声

鐘撞いてこぶし一片揺らしけり

末黒野に背山大きく影を置き

まぶしさの畦となりけり路の臺

騙されて流れてみだし落椿 福生

薄氷やまつ赤な華と化す金魚

金縷梅やひとり遊びの吾子はいま

さんしゅゆと言ふ口もとをつまみたる

薔薇の芽やほほえむ子らに声のなし

車椅子押して岬へ藪椿 いわき

波音の響く関跡紅梅花

早春や蒿雀遊びし勿来関

梅の香や歴史館出て海を見に

来るなかれと拒みし関の椿かな

佐藤やすこ